土を練り　火を焚く

人は今日まで「土」と「火」の存在に密接に関わってきた。

本提案は、人にとって最もプリミティブな存在である「土」と「火」に価値を見出し

都市に生産とモノの流通機能を付与する「工房」を提案することで

都市を再び育んでいくきっかけをつくる事を目的とする。

00. 背景　かつてのプリミティブな暮らし方

00-1.「土」と「火」との暮らし

人は今日まで「土」と「火」の存在に密接に関わってきた。
例えば食器は陶器で作られ、風を凌ぐために壁を土で塗り、
雨を凌ぐために土を練って焼くことで瓦を作った。


「火」との暮らし


「土」との暮らし

このように「土」と「火」は人にとってプリミティブな存在であり両者に内包される「練る」「固める」「焼く」などの行為は本来誰しもが生活の中で当たり前のように行う行為であったといえる。

00-2. 都市の「土」「火」離れ

プリミティブな生産は脆いからこそ**「育む」行為**が内包される。生活の中の火は絶えないように見守られ、
壁に隙間ができれば上から土で塗り固めるというような時と場合に応じた行為である。



しかし、土と火から離れた都市での生活は、育む行為によって生まれる里山的な地域コミュニティをも薄れさせた。
地域でのコミュニティが育まれないままの拡大によって、都市はスポンジ化などの問題を抱え始めている。

02. 問題提起　プリミティブさを内包する都市更新本来の在り方

使われない駐車場や空き地なども増えてくる都市の「スポンジ化」が予想されるこれからの時代、
需要に対する「飽き」を新たな消費で埋めていくことには限界が来ているのではないだろうか。

現に空堀商店街付近では使われない駐車場や商店街の空き店舗が
多く見られ、誰にも管理されない「空白」が増え始めている。



商店街に出来始めている物理的な「空白」

そんな今の都市だからこそ
地域に残るコミュニティを活かし、
地域住民によって育まれていく
「プリミティブさ」を内包した
暮らしの更新が、本来の都市の
あり方ではないだろうか。



03. コンセプト　「土」と「火」を核とした地域の「工房」

本提案は
今なお空堀に暮らす人々の生活に再び土と火を介入させながら地域の「工房」としていくことで
建物の修繕やモノの流通などを通じて共同管理コミュニティを再構築し、都市の空白に対応させて
いくプリミティブな都市更新である。

土と火はどこにでも存在し、誰しもが触れることが出来ながらも、
管理を必要とする。また、プリミティブな素材と技術による完成品は
脆く、修繕を必要とする。そういった暮らしの中で単に造って壊すだけ
でない街本来のあり方を提案する。



01. 敷地　歴史の堆積する地 大阪「空堀」

01-1. 位置情報

大阪市の中央区に位置する空堀地区。
空堀の中心部にある「空堀商店街」は
約 800mほどの商店街で、付近には
昭和レトロな街並みや空襲を逃れた
古い長屋が今なお残っている地域である。






計画地付近



空堀商店街の位置する場所

01-2. 空堀における「土」と「火」の存在

そんな空堀界隈は起伏が激しく、
街のいたるところに坂道や段差など、
その地形に大きな特徴を持つ。


空堀商店街の起伏


空堀にある階段

その理由はこの地がかつて大阪城
建設のための瓦の土取場として
宅地開発され、瓦の製造のために
地形を掘り起こして出来たから。


窯の共同管理


かつての空堀の様子

街の所々に瓦を製造するための「達磨窯」が造られ、古くなれば窯を
築き直しながら瓦を造り続けるような共同管理の地域コミュニティが存在した。

このように空堀の街並みはかつての「土」と「火」を使うことで紡がれた
プリミティブな暮らしによる共同管理のコミュニティが育んできたものである。

01-3. 薄れゆく共同管理コミュニティ

空堀の位置する中央区では近年常住人口が増え続け、
同時にマンション建設が急増している。

新規住民が多く参入する一方で古くから空堀に住む地域住民による
共同管理の地域コミュニティは今もわずかに残っている。



しかしマンション建設の急増と長屋に住む地域住民の高齢化などの
理由から現存する共同管理コミュニティは失われつつある。

同時に長屋自体の老朽化に伴う空き家や空き地などの物理的な
「空白」もでき始めている状態である。

04. プログラム　段階的に育まれていく暮らし

日常に根付きやすい小さな火と少ない土から、瓦や煉瓦を生産するような大きな火と掘り起こして土を使う生活まで、
3段階に分けて空堀の日常を再構築し、プリミティブな地域の工房を拠点とした地域間の繋がりと街並みを育む。

phase1　小さな火と少ない土
→触れ合うきっかけをつくる

火×土×再構築



phase2　大きな火と掘り起こされる土
→生産行為を通じた繋がりを形成

火×土×生産



phase3　様々な土と火
→瓦・煉瓦・土などの流通を通じた街の更新

火×土×流通



Phase1　火×土×再構築

日常に介入しだす土と火

工房で作られた陶芸や小物などが販売される

空堀商店街

空堀マーケット

直売所

街の休憩所
+400

-100

-100

畑
-1300

共同調理場

土盛場
-1000

調理場
+400

+1700

児童クラブ

空堀食堂
+400

陶芸工房
+900

-100

-100

+1000
共同アトリエ

薪置き場
+400

畑でとれたものを販売
軽トラなどで配達もされていく

食器サイズの釜で趣味レベルの
焼き物がつくられる

材料置き場

室内で行う料理ではなく
キャンプ的に行うもの

調理場でつくられたものを提供

A

A`

配置図 兼 平面図　S=1:200

N

0m　1m　5m　10m　20m

キー・プレイヤー



空堀の日常に火と土の存在が介入しだす

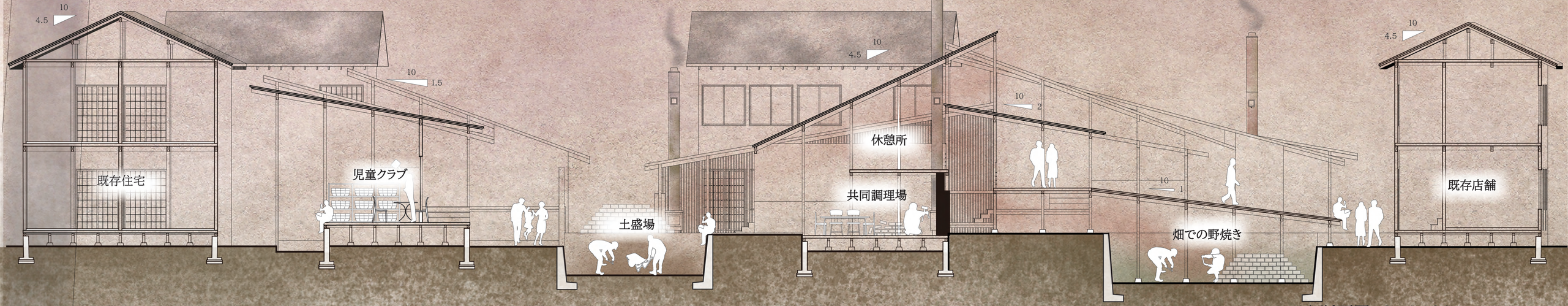
料理や趣味レベルでの小さな窯の貸し借りが行われ始め、
既存の共同管理コミュニティは維持されていくと同時に
商店街の延長として商店街沿いにポップアップなどの
小さな商いが始まっていく。


土盛場付近の様子






空堀マーケットの賑わい



A-A` 断面図　S=1:100

0m　1m　5m　10m

Phase 2　火×土×生産

浸透し始める土と火



配置図 兼 平面図　S=1:200

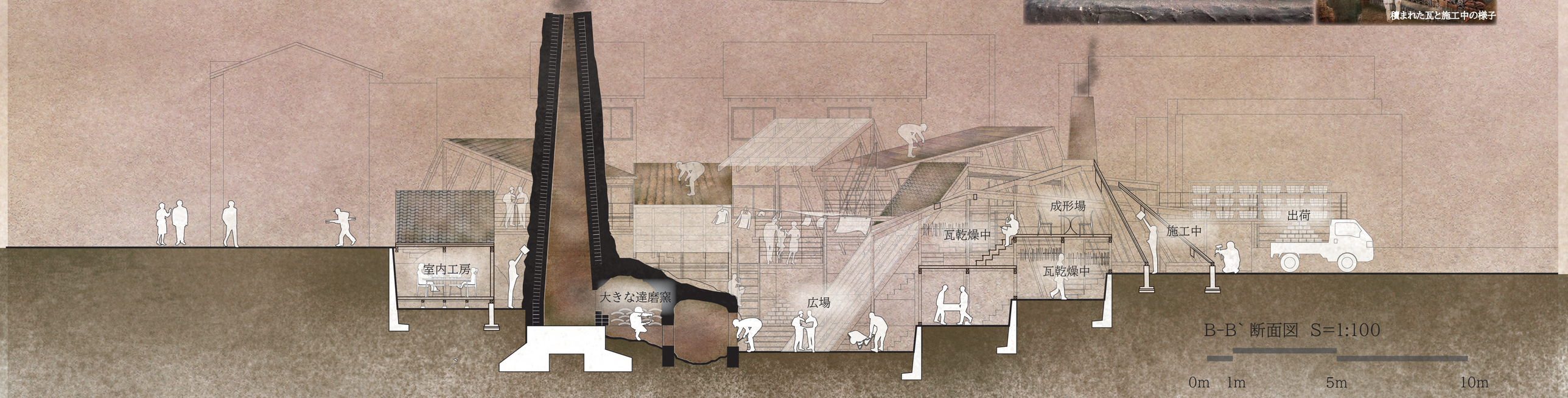
0m　1m　5m　10m　20m

キー・プレイヤー



Phase１の裏にある空き家が徐々に解体され始め
本格的に土が生活に浸透していく。
大きな窯が出来上がると瓦や煉瓦などの建築材料が
つくられ始め空堀工房の拠点として機能し始める





B-B` 断面図　S=1:100

0m　1m　5m　10m

Phase3　様々な土 × 火

育まれる空堀へ

キー・プレイヤー



空堀に点々と存在する「空白」が補修、
活用され始め小さな工房が広がっていく。
空白をビルや駐車場といった消費で埋めるの
ではなく管理の必要な土や火を使う工房という
形で埋めていくことで空堀の街並みは育まれていく





土が盛られた子供たちの公園

土の流通が始まり、空堀内に土が溜まっていくと
同時に子供たちの小さなたまり場ができ始める



小さな作業場

個人用の家具や Phase 1 でポップアップを
開くための制作物などがつくられる



廃材交換所

建築材料のフリーマーケット。
Phase 2 で余った材料や空堀にある
空き家から出る廃材などが交換される

共同アトリエ

アーティストを中心とする、流通する瓦や煉瓦を
用いた建物の補修またはデザインが始まっていく





窯が置かれた街の休憩所

釜が空堀の街中にも作られていくことで
火を共に囲みながら一息つける場所が生まれる

かつては「土」と「火」によって育まれた空堀。
今では失われたプリミティブな暮らしは
長い年月をかけながら再び浸透していく。
再び育まれる空堀の街並みと暮らし方は
土地の記憶となり多くの人々に受け継がれる。